

昭和52年8月8日開催 緊急幹事会議事録

昭和52年8月6日早朝から有珠山で有感地震を含む火山性地震が群発し、室蘭地方気象台は数回にわたり臨時火山情報を発表し警戒を強めていたところ、7日9時12分、噴火し、その後も噴火を繰り返している。該火山の活動の特徴等からみて、活動のより一層の活発化若しくは長期化も十分考えられるため、今後の観測体制について打合せ並びに火山活動について総合判断を発表しておく必要上、取り急ぎ幹事会を開催した。

日 時：昭和52年8月8日 13時30分～15時45分

場 所：気象庁観測部会議室

出席者：永田、岡村（文部省）、城野、下鶴、神沼、渡辺、諏訪

オブザーバー：生田（国土庁）、関口、大野（以上気象庁）

1. 活動経過（報告）：気象庁（野島）
2. 観測体制の現状

気象庁：有珠山A点（室蘭地方気象台）の地震計は初回噴火後、まもなく停止したので、北海道駒ヶ岳火山用地震計（森測候所）、樽前山火山用地震計（苫小牧測候所）による有珠火山性地震の回数で推移をみている。噴煙等の遠望観測は森測候所（有珠山頂から南南西5.4km）から実施している。

札幌管区気象台と室蘭地方気象台共同で6日17時10分から壮瞥町で臨時地震観測を実施し、有感、無感の地震観測を実施している。

北 大：洞爺湖温泉、有珠山、昭和新山の3点で臨時地震観測中だが、高感度のため振り切れ、震源をきめるまでに至らない。

気象庁（機動班）：機動班2名、携帯型地震計1台を持参し、8日飛行機で出発した。あと1名は10日出発予定。地震計4セット等は8日発送し、10日現地到着の見込み。

下鶴幹事の見解

- ・北大・勝井教授によれば石英安山岩質マグマ（dacite magma）噴出が確認されているので本格活動と思われる。
- ・有感地震回数の観測場所は一定していなくてはならない。
- ・えびの地震（1968年）のときは、大学・気象庁を一体とした総合観測班を現地におき、福岡管区気象台がマスコミ等への窓口となった。今回も同様な機関の発足が望ましく、その場合の窓口は札幌管区気象台にお願いすることになるのではないか。
- ・火山噴火予知連絡会の前線基地として現地でプレスリリースを含めた火山活動監視もあり得る。
- ・壮瞥町役場には電話が1本しかないのでホットラインをしないと連絡がスムーズにいかない。

3. 統一見解について

フリートーチキング

- ・群発地震発生後30時間で噴火したが、前駆段階が短い印象をうける（諏訪委員）
- ・過去の活動事例からみて長びく可能性（下鶴幹事）
- ・民衆の側からみて降灰が続いたあと収まるのか、噴石等を噴出する活動があるのか、土地隆起が起こるのかは関心事であると同時に行政面で活火山の地域指定の問題とからみ、見通しが立たないと動けぬ事情がある（城野幹事）
- ・見通しについては全くわからない。観測を続け見きわめる必要がある（下鶴、諏訪委員）
- ・山が浅く民家が近いのと、火砕流・泥流をひき起こしやすい火山の特徴から、特に警戒が必要である（諏訪委員）
- ・震源の移動を捕捉することが火山活動の推移を見守るうえで、重要な決め手となる（下鶴幹事）

4. （統一見解） 有珠山の噴火について

有珠山では6日早朝から火山性地震が増加したので、室蘭地方気象台では火山情報を発表して関係機関に通知した。その後、火山性地震の発生は6日夕方から7日朝にかけて更に活発化したので、7時50分に4回目の火山情報を発表し注意をうながした。このあと、7日の9時12分に有珠山頂カルデラ内の小有珠南東斜面より噴火し、噴煙の高さは12000m、石英安山岩質軽石を含む火山灰を広範囲に降らせた。その後もなお、小噴火を繰り返しつつあり、地震活動は依然活発である。

この火山の特徴として地震活動の継続中は、火山活動（泥流、火砕流等の流出を含む）を繰り返す傾向があるので、気象庁・大学は協力して地震活動等の観測を実施し、火山活動の推移を見守りつつある。

明治43年及び昭和18～20年等におけるこの火山の活動の事例からみて今回の活動もやや長期化する可能性があり警戒をつづける必要がある。

5. 今後の観測体制

気象庁：地震観測 1点 9日～

3点 12日～

噴火の経過（目視）

有感地震震度調査

温泉温度等の観測

気象研究所：光波測量を計画

大 学：昭和52年度に予定していた浅間山・阿蘇山の集中観測の経費の一部を有珠山の集中観測に振替える。

地震観測

北 大：現在3点を5点にする

震 研：加速度地震計4点 14日～

東北大：1～2点

測 地

水準測量：北大、震研、京大

光波測量：北大

航空写真：MSS：計画

地 磁 気：計画

国土地理院：水準測量の実施を要望する（永田会長）

記者会見：15：45～16：35

昭和52年8月25日開催 緊急幹事会議事録

日 時：昭和52年8月25日 10時15分～12時15分

場 所：気象庁観測部会議室

出席者：下鶴、久武、城野、飯田（文部省）、佐藤、末広（気象庁）、渡辺、諏訪

オブザーバー：柳田（国土庁）、平畑（文部省）、大野（気象庁）

開会に当り、渡辺委員から、8日の緊急幹事会で前線基地の考えが出たが、11日には非常災害対策本部も発足し、会長の指示があつて、12日に渡辺が準備のため現地に向い、初めてのケースであつたが現地に総合観測班を作つた。主な目的は、各機関の観測の総合調整、総合判断を行うことである。下鶴委員の帰京を機に本日再検討をするため、お集り願つたが、下鶴委員が出席するまで座長をつとめる旨の挨拶があつた。

1. 前回の緊急幹事会議事録（案）の承認

一部字句を訂正して承認された。

2. 現地状況報告

城野委員：10日及び17-18日の政府調査団に同行した。11日非常災害対策本部が発足し、15日2回目の本部会議で、今までにとられた措置、今後とるべき措置等を検討、16日に関係関係会議が開かれた。

恒久対策にうつる場合に立入ができないのが問題で、火山の活動の方向を知りたい。避難している人達の生活、夏休み明けの学童の処置、観光受入、泥流対策工事等のためにもう少し具体的な見解を聞きたい。

諏訪委員：20日から23日まで現地にいて、若干の観測を行いながら、後で行う予定の光波・赤外熱分布の観測のために現地を見てきた。地震観測点は十分にあり、震源決定は重要なので注意深く行う必要がある。

下鶴委員：空中赤外熱映像の観測は23日未明実施し完全な記録がとれた。外輪山の外側にホットスポットはなく、小有珠の南東に温度の高いところがあり震源分布とも一致している。その他割れ目や大有珠にも高温部がある。東大の加速度型地震計によると17日あたりから大きい地震が増加している。これは豪雨があつたため、マグマが水と接触し水蒸気爆発して揮発性成分がぬけた結果、粘性が大きくなったためと考えられる。

3. 今後の観測体制について

佐藤委員：噴火に伴う観測強化として、特定水準測量、定点における高度角測定、空中写真測量及び特調費による観測を実施及び計画しており、変動の大きいところをくりかえし測量することにしている。

久武委員：先週要望をおきし、昨日まとめてできて、本日大蔵省と折衝に入る。9月上旬には実施可能となる見込。地殻変動（国土地理院、気象研究所）、空中赤外熱映像による地上温度

分布（気象研究所）、火山噴出物関係（地質調査所、北海道農業及び林業試験場、防災科学技術センター、水産庁、北海道開発庁）等であるが、総額は約 6,000 万円くらいと考えている。

飯田（文部省）：有珠山の観測のため約 660 万円を特別に支出することを計画している。

4. その他

対策を実施する必要上、立入禁止地域に入るときなど火山活動状況を聞かれれば、総合観測班の見解を伝える。総合観測班から緊急に連絡する必要があるとき自治体の 1 か所に通知すれば総べてに伝わる組織がほしい、等の意見がでた。